特集

いのちの地図。

卒業生が僕らに託した、救い合える未来

『体験することの大切さを伝えたい』

目の前で人が倒れている。でも、体が思うように動かなかった――。

昨年の夏、ある担任の先生が経験した切実な思いが、一つのプロジェクトを動かしました。知識としては知っていても、いざというときに「実践」することの難しさ。そのもどかしさをきっかけに、子どもたちや保護者を対象に救命講習の受講を提案。「体験することの大切さを伝えたい――」。その想いが『AED（自動体外式除細動器）マップ』の作成として、カタチになりました。

5月は、新しい環境に少しずつ慣れはじめ、緊張感がほどけ、新緑のレジャーシーズンの訪れとともに行動範囲が広がります。ふとした油断から事故や急病が発生しやすくなる季節でもあります。

卒業生たちが在校生へ、そして地域へ残してくれた「いのちの地図」。ここから私たち大人が学べることは何でしょうか。開放的な気分になる季節だからこそ、誰もが救い手になれる街をめざした、ある小学校の取り組みをご紹介します。

『知識があっても、一歩が出なかった』

「うだるような暑さの中、道端で、一人の妊婦さんが倒れていました。頭の中には、救命の基礎的な知識はありましたが、いざ人が倒れているのを目の当たりにしたとき、思うように体が動きませんでした」。そう語るのは、行橋小学校の穴繁（かなしげ）真紀子先生。いざというとき、知識どおりにはいかないことを痛感したと言います。

穴繁先生は、自身の経験から、子どもたちには、いざというときに行動できる力を身につけてほしいと、消防本部が実施している救命講習を申し込みました。さらに、講習で体験したことを何か体験学習として応用できないか、消防本部に相談。そこから『AEDマップ』の制作が始まりました。

当時の6年生、全4クラスの子どもたちと担任4名が、クラスの垣根を越えて卒業制作としてマップの制作をスタート。当時の様子を、卒業生3名と先生に伺いました。

まずは、自分たちで調べるところから。インターネットで検索をしたり、実際街に出て歩いて探したりしました。

「インターネットで検索したけれど、実際は検索結果以上にもっとたくさんあった。先生に教えてもらうだけではなく、自分たちで調べることで、AEDへの関心が高まりました。」こう話すのは、大下湊佑（そうすけ）さん（集合写真中央）。家庭でも今回の体験学習の話をしたそうです。

『自分の足で、目で、確かめた。12歳が刻んだ、まちの安心』

「人がたくさん集まる場所でも、設置されていないこともあり、意外だった。設置場所が分からないと、いざというときに人の命を救うことができません。たくさんの人に設置場所を知ってほしいと思いました。」と、知っておくことの重要性を話してくれたのは、大西魁（かい）さん（集合写真左）。

「予測を立てて探してみたけど、予測と違うところが多かった。野球をやっているので、試合で色々な会場に行く機会があります。行った先々で、まずは設置場所を確認するようになりました。『把握』することが命を救うことに繋がると実感しました。」と、今回の学習を自分事と捉え、即実践に移していたのは森田旺士朗（おうしろう）さん（集合写真右）。

今回、子どもたちが自ら街を歩き、一歩ずつ足で稼いだ情報は、デジタルデータを超えた「生きた知識」となりました。「人が多く集まる場所にあるはず」という思い込みを捨て、一か所ずつ設置場所を確認していく過程で、彼らは「情報の鮮度」と「現場のリアル」の重要性を肌で感じたのです。

特に印象的なのは、この学習を「自分事」として捉え、すでに行動に移している点です。

知識を知識のままで終わらせず、日常の経験へと昇華させる。その真っすぐな実践力こそ、私たち地域の大人が今、学ぶべき姿勢ではないでしょうか。

「いざというときに、場所を知らなければ救える命も救えない――」。彼らが自分たちで見つけ出し、地図上に記したAEDの印は、この街の「安心の数」であり、次世代からの「命のメッセージ」なのです。

『救急車を待つ間の絶望を、希望に変えるのは私たち』

行橋市消防本部が発表した「令和7年版火災・救急・救助統計」では、令和7年の救急出動件数は4、012件。前年から113件の増加となっています。救急搬送人員は3、592人で、前年から138人増加。いずれも4年連続で過去最多を記録しています。救急出動件数については、統計調査開始以降初の4、000件越え。これは、市内で1日あたり約20人に1人が救急車で病院へ搬送されたことになります。いかがでしょうか。この数字を聞くと、救急の現場は意外と身近で、決して「どこか遠い場所の出来事」ではありません。いつ大切な人の緊急事態に遭遇し、あなた自身が助けを呼ぶ、あるいは命を繋ぐ最初の一人になるかもしれないのです。その一分一秒が、その後の未来を大きく左右します。

同統計によると、救急隊員の現場到着時間は、平均7.3分。この時間に、応急の手当ができるか否かが大きな鍵を握っています。

実際に、心肺停止の傷病者に対して、救急車が到着するまでの間に心肺蘇生とAEDを実施した場合と、何もしなかった場合とを比較すると、1か月後の生存率は約6.6倍、社会復帰率は約11倍と大きな差が出ています（総務省公表「令和7年版救急・救助の現況」）。

この数字は、救急隊員ではなく『その場に居合わせたあなた』こそが、命を繋ぐ最大のキーマンであることを示しています。いざという時、迷わず動ける自分であるために。救命講習で正しい知識を身につけ、日頃から「心の準備」をしておきませんか。特別な技術が必要なわけではありません。例えば、今日、帰り道にあるAEDの場所をひとつ確認する。それだけでも、誰かにとっての「絶望」を「希望」に変える第一歩になります。

市内の公共施設や学校、商業施設など、そこにあるAEDは、私たちが互いの命を救い合うためのものです。子どもたちがその重要性に気づき始めた今、大人である私たちも一歩踏み出してみることが大切です。あなたのその知識と勇気が、誰かの「明日」を繋ぐ唯一の光になるかもしれません。

AED MAP

ID 0030515

（一財）日本救急医療財団では、突然の心停止時にAEDを迅速に活用し救命率を向上させる目的で、全国のAED設置情報を提供するサイト「財団全国AEDマップ」を公開しています。

原則として、法律によるAEDの設置義務はありませんが、多くの学校や商業施設、ホテル、マンションなどでに設置されています。

設置者の地図情報への登録のおかげで、人命救助に不可欠なAEDの設置箇所がインターネット上で確認できます。

『マップは完成。ここから先は、大人が応える番。』

Teacher's Voice

大村 恭平（おおむら きょうへい） 先生

校区内を深く探求することで、より“自分事”として捉えることができると感じました。「いのちを守る学習」として、今後ハザードマップなどにも応用できないかと考えています。

穴繁 真紀子（あなしげ まきこ） 先生

体験学習を通して、子どもたちの「自主性」の向上を感じました。今回の体験や経験を糧に、自ら一歩を踏み出し『行動できる人』へと成長していくことを心から願っています。

西村 夏海（にしむら なつみ） 先生

市内だけではなく、休日に家族と出かけた先でもAEDの設置場所を確認して教えてくれました。今回の学習が、子どもたちの意識の向上に繋がっていると実感しました。

原田 駆（はらだ かける） 先生

マンションや会社にもAEDがあることを、子どもたちの発見から学びました。事故の多い場所や危険箇所など、今後も身近な場所への『生きた学び』を継続していきたいです。

子どもたちが自らの足で描き出したのは、街の安心を支える「いのちの地図」でした。自ら考え、主体的に動く体験学習の精神は、今、学校という枠を越えて地域社会へと広がり始めています。

本市が推進する「命の教育」は、単なる知識の習得に留まりません。目の前の命を慈しみ、いざというときに守る側に回れる勇気を育む――。今回の取り組みは、私たちがめざす新しい学びのカタチを象徴するものです。

そんな子どもたちの真っすぐな姿勢に応え、私たち大人も、まずは身近なAEDの場所を確かめる、あるいは地域の防災訓練に目を向けるなど、具体的な一歩を刻むことが重要です。一人ひとりの「知る」姿勢、そして勇気を持って「行動する」決意が幾重にも重なり合うことで、この街は、より温かく、より確かな「救い合える未来」へと繋がっていくのではないでしょうか。

ここからが第一歩！

普通救命講習（個人向け）

ID 0011767　問 救急係（☎25-5054）

行橋市では、2年連続で1年間に1,600人以上の方が救命講習を受講しています。
あなたもいざという時のために、受講してみませんか。

日 6/7 ◷ 9:00～12:00
場 消防本部
対 市内在住・在勤・在学
料 無料
定 25人
申 オンライン

【申込フォーム】

こちらの動画も要チェック！

消防署員が出演・制作！

【市公式YouTube】